

論文要旨

氏名	吉田 忠司
タイトル	Changes in oral health-related quality of life during implant treatment in partially edentulous patients: A prospective study
論文の要旨 <p>欠損補綴治療の目的は歯の欠損により生じた機能的・審美的障害を回復し患者の Quality of Life (QOL) 向上を図ることであるため、QOL が医療評価のための包括的患者立脚型アウトカムとして重要視されるようになってきている。しかしながら、欠損補綴治療の1つとして広く用いられるようになったインプラント補綴治療が患者の口腔関連 QOL に与える影響についてはいまだ明らかでないのが現状である。そこで本研究では、インプラント支持の固定性補綴装置による治療を行った少数歯欠損患者の口腔関連 QOL を経時的に測定し、その動態および欠損形態の違いによる口腔関連 QOL の経時変化への影響を評価することを目的とした。</p> <p>被験者は3歯以下の欠損を有する少数歯欠損患者20名(女性10名、男性10名、平均年齢51.9歳)とし、中間欠損患者は6名、遊離端欠損患者は14名であった。各患者に1~3本、合計33本(上顎8本、下顎25本)のインプラントを埋入し、埋入手術2ヶ月以上経過後にレジン製暫間補綴装置を装着、その1ヶ月以上経過後に最終上部構造を装着した。口腔関連 QOL の評価は OHIP の短縮版である OHIP-14 の日本語版 (OHIP-J14) を用いて、インプラント埋入手術前(手術前)、埋入手術1週間後(手術後)、暫間補綴装着1週間後(暫間補綴後)および最終上部構造装着1週間後(最終補綴後)にアンケート調査を実施した。統計学的分析には Wilcoxon の順位検定・ボンフェローニ法を用いた。</p> <p>OHIP-J14 全合計スコアは、手術前と比較して最終補綴後にのみ有意に低い値を示した($p<0.05$)。領域別 OHIP スコアは、「痛み」、「身体的障害」の領域で手術前と比較して最終補綴後に有意に低い値を示し($p<0.05$)、「心理的不快感」の領域で手術前と比較して暫間補綴後および最終補綴後に有意に低い値を示した($p<0.05$)。一方、「機能の制限」の領域では手術前と比較して手術後に有意に高い値を示した($p<0.05$)。また、欠損形態別 OHIP-J14 全合計スコアは、遊離端欠損症例において手術前と比較して最終補綴後に有意に低い値を示したが($p<0.05$)、中間欠損症例では有意な差を認めなかった。</p> <p>以上より、少数歯欠損患者に対するインプラント治療は手術後、一時的に機能の制限を受けるものの、暫間補綴装着により心理的不快感が改善され、最終補綴装着により痛みおよび身体的障害が軽減し総合的な口腔関連 QOL を向上した。また、インプラント治療は特に遊離端欠損患者において有効な治療法であることが示唆された。</p>	

